

きいちのぬりえを覚えていますか？

町屋のぬりえ美術館からコレクション寄贈

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL03(3807)9234
登録(05)0061号



写真2 速報展ではきいちがよく題材とした花嫁も展示した。



写真3 尾久図書館ではぬりえの体験と展示が行われた。



写真1 きいちは季節のイベントも題材に描いた。子どもたちにとって楽しいクリスマス華やかに描いた袋の絵。



写真4 写真1の裏。袋の裏にもぬりえが付いていた。

憧れや夢が描かれていて、子どもたちが夢中になりました。ぬりえは、時に時代を映す鏡であり、生活や風俗、流行などを知ることでもできる貴重な資料といえます。今後、大切に保存し、調査研究を進めるとともに、展示や体験を通して将来に伝えていきます。

ぬりえ美術館コレクションの寄贈 ぬりえ美術館は、平成14年(二〇〇二)に、「きいちのぬりえ」で有名なぬりえ作家・蔦谷喜一の姪、金子マサ氏が町屋四丁目に開館した美術館です。蔦谷喜一のぬりえや作品のみならず、昭和20、30年代(一九四五、五五)を中心とした約7000点に及ぶぬりえ等を収蔵し、日本で唯一のぬりえ美術館として、親しまれてきました。

令和4年(二〇二二)秋、惜しまれながら閉館となりましたが、区が貴重なコレクションを引き継ぐことになり、令和5年度春に開催した「あらかわの文化財速報展」で、その一部を公開しました。前期は「遊び」、後期は「梅雨」と「花嫁」をテーマにぬりえの袋を中心に紹介しました。袋に収められたぬりえは白黒ですが、袋の絵は、子供たちの目を惹く鮮やかな色彩のもので、早くもきいちのぬりえの魅力が伝えることができました。

作者とぬりえ 蔦谷喜一は「きいちのぬりえ」の作者として知られます。ぬりえは、戦後、昭和20、30年代に子どもたちの間で大流行し、「きいちのぬりえ」はひと月に100万セットが売れるときもあったといえます。テレビやアニメが台頭する昭和38、39年頃までブームが続きました。その後、昭和50年代の展覧会をきっかけに、再び注目されるようになり、各企業の広告や商品に使われ第二次ブームが起きました。晩年は、より細密な童女画などを手がけ、生涯現役の画家として活躍しました。

ぬりえコレクションの活用 5月から、区内各図書館で袋絵の複写が各1点展示されています。これまでぬりえ美術館と連携してぬりえ体験を行ってきた町屋図書館では、引き続き体験を行っています。館内か自宅で色を塗り、持っていくと掲示されます。懐かしく愛らしいぬりえは、子どもたちの

企画展こぼれ話⑮



飯塚繁次郎の薬の広告

9月30日から11月5日まで、「南千住の薬屋さん―疳の妙薬小児活生丸―」という企画展を開催した。寄託資料である区の登録有形文化財の飯塚家資料の公開を兼ねて、飯塚家が製造・販売していた小児活生丸に関する資料を中心に展示を行った。

江戸時代、千住宿小塚原町には、飯塚家資料の飯塚勝三郎家の他に、もう一軒の飯塚家があった。本家にあたる飯塚繁次郎家である。

*

展示に盛り込めなかった資料に、「民家重宝 家内安全福寿相」という資料がある。嘉永3年（一八五〇）、芳年舎の序で地本間屋森屋治兵衛から出版された。豊年舎は、寺子屋の教科書としてよく使われた「実語教」をもじった「道化実語教」や、和算書「塵芥記」をもじった「教化地口心学人孝記」などの著作で知られる。江戸の板本は、裏表紙の見返し部分が広告スペースに当てられていることが多い。アドミュージアム東京所蔵の「民家重宝 家内安全福寿相」には、松屋繁次郎が製造していた薬の広告が載っている（写真）。

どういう広告かというと、現在の栃木県足利市にあった荒物屋、小林彦右衛門の店の広告である。この広告によれば、彦右衛門はむしろやござ、縄、蠟燭の他に薬も取り扱っていた。その中に松

もつとも、活生丸（小児活生丸）の薬法は、弘化4年（一八四七）に飯塚勝三郎家へ譲られており、今後決して繁次郎家で製造販売しませんとする譲状が残っているの、繁次郎名義になっている点は検討を要する。

勢龍円は効能書が残っており（「痢病総論」〈東京大学総合図書館蔵鶴軒文庫〉）、それによれば、痢病、いふなればお腹の薬である。江戸だけでなく、大坂・京都にも取次所があり、諸国で売り広められていた。今まで、具体的な取次先がわからなかったが、当史料により、その一つが判明した。

* *

小林彦右衛門が、「民家重宝 家内安全福寿相」に広告を載せた理由は定かではない。ただ、この資料は、旅立ちの吉凶や婚礼の吉凶や、家作・転居の慎み方など、何か困った時に紐解く重宝記のような、占いのマニュアル本の趣をもっている。現在、江戸の出版物に掲載された飯塚家の薬の広告は確認されておらず、即断はできないが、ここに薬の広告を載せるというのは、小林彦右衛門にとって、何らかの勝算があったに違いない。占いも薬も、手段は異なるものの、悩みを解消するという点では共通性がある。案外読者層が重なっていたのかもしれない。

* * *

飯塚繁次郎については、図録『南千住の薬屋さん』に現在分かる範囲で解説した。こちらをご覧ください。

（亀川泰照）

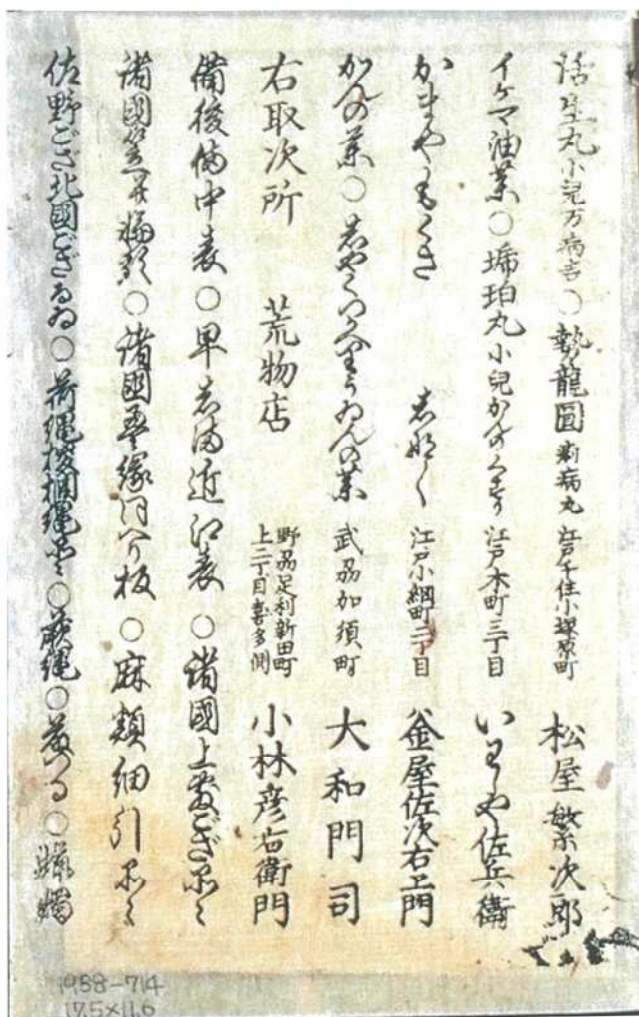


写真 「民家重宝 家内安全福寿相」（アドミュージアム東京所蔵）

た。その中に松屋繁次郎が製造元となつてある。一つは活生丸で「小児万病吉」（小児の万病によし）の薬、もう一つは「勢龍円」で痢病、すなわち食中毒や赤痢など、下痢をともしなう病の丸薬である。

⑧ 世界歴史の中の写真 関東大震災の救援

撮影されたことがわかる。では写真の解説を読んでみよう。

前半は、大正12年9月1日地震が起きるや三昼夜にわたる火災のため横浜市と大東京は八割方

今年は、大正12年（一九二三）9月1日に発生したM7.9の関東大震災から百年に当たる節目の年である。昨年の企画展でも、震災時のあらかわの古写真を紹介したが、今回は震災後の救援活動の写真をとりあげたい。

尾久の救援活動 左の写真（写真1）は、被害が少なかった尾久の農家に設けられた配給所である。門や家屋の前で、救助米の配給待ちの罹災者の行列が写されている。写真に記された日付と場所は、「大正十二年十月十九日下尾久配給所」とあり、この写真が地震発生から1ヶ月半後に



写真1 大正12年10月19日下尾久配給所

灰燼に帰し、死傷者数は数知れず、デマに惑わされるなど日本全国は大混乱に陥り、戒厳令が出るほどだったという内容である。後半は、尾久町役場の職員はもちろん町を挙げて避難者の救助を乞い、軍民が一同となって秩序の安定に努めた。写真は、下尾久正木吉家における救助米の配給の様子だと綴られている。

大正元年の『日本紳士録17版』によれば、この正木米吉氏は農家で、住所は下尾久968（現東尾久六丁目五、荒川区立尾久第三児童遊園地）に住んでいた。『新興の尾久町』（大正12年）にも、収入役として登場し、尾久町の町政にかかわりを持つ人物であったことが分かる。

集まる救援物資と分配 さて、これによれば米の配給の話のみだが、救援物資は当時他にどのようなものがあつたのだろうか？ 尾久の記載はないが、『大正大震災災誌』（大正14年、警視庁）から、震災時のあらかわの物資配給の様子についてまとめてみよう。

大正十二年九月一日関東ノ
地二大地震起ルヤ三晝夜
二巨ル火災ノ為メ横浜市
ヲ始メ大東京ノ八分通り
灰燼ニ帰シ人畜死傷其
數ヲ知ラズ其間流言蜚
語二惑ハサレ日本全国殆混
乱状態ニ陥リ遂ニ戒厳
令ヲ布クニ至ル

※文字部分翻刻

今更ニ此ノ時ニ於テハ町役場吏
員ハ勿論今町舉テ避難
者ノ救助ニ努力シ軍民
一致能ク其秩序ヲ保チ
得ヨリ此ニ揚ケルハ下尾久
正木米吉家ニ於ケル救
助米配給ノ実況ナリ

南千住警察署管轄の南千住町と三河島町は、9月1日の時点で、南千住町役場は、素盞雄神社境内、三河島町役場は、大日本原毛会社（現、区役所辺り）及び峡田第二小学校において炊き出しを開始した。同26日には炊き出しと現品支給を中止して困窮者のみ配給に切り替えたところ。救援物資の内容は、自動車15台・ガソリン・薬品及びピンセット他12

点・味噌大樽6本・醤油9升詰16本・玄米100俵、警察が両町役場に託して避難者に配給した。他にも多くの物資が送られてきており、例えば、南千住製氷会社から氷300貫の寄贈があつて、氷は傷病者に頒布したという。

また南千住警察署日暮里分署の記載によれば、9月1日には日暮里町役場で炊き出し配給が開始されたが、それから10月10日までに要した物資総数量は米百3石1斗7升・味噌28樽・醤油19樽・漬物100樽・缶詰615箱等、総受給延べ人数は6万2817名を数えた、とある。日暮里には篤志家より食料品その他の物資の寄贈が多かったとの記載もあり、大量の避難者に応えるに十分な救援物資が集まっていたことがわかる。

なお、写真2には、震災後の日暮里駅に全国から集まった救援物資が写っている。ホーム右手に山と積まれた木樽は味噌か醤油だろう。

未曾有の大地震という、建物倒壊など発生直後ばかりが着目されがちだが、そこから数ヶ月にわたる復興の過程を追う、例えば当時地域の配給所や救護所がどこに何ヶ月ぐらい置かれ、復興の糸口とな

か、といったことを調べるのも、地域がたとった歴史を知る上で重要であり、防災意識を高めるためにも有用ではないだろうか。

（高柳吟音）



写真2 救援の物資東京に至る（部分）（『関東大震災写真帖』）

伝統芸能等記録映像制作報告

再開した「御十夜祭」



宮地陸橋（通称、宮地のロータリー）の北東、

荒川四丁目の住宅街の中に蓮田子育地蔵・六地藏があります。この秋、三河島の伝統行事・御十夜祭が開かれ、その記録映像の撮影を行いました。

蓮田子育地蔵・六地藏の立地 「蓮田」とは三河島村の小字（地名）で、子育地蔵と六地藏が並んで立っています。前の道は、地元で「江戸道」と呼んでいる古道です。「武洲豊島郡三河島村絵図」（国立国会図書館蔵）には現在地と思われる場所に「地藏」と書かれており、近世から石仏が安置された辻としての機能を果たしていた場所だったことが分かります。

庚申塚と六地藏 昭和11年刊行の『三河島町郷土史』によると「庚申塚」があったと記されています。この六地藏は、境界や辻に建てられる6体の



写真1 御十夜祭当日の六地藏

の地藏ではなく、庚申塔を含む複数の石仏・石塔を示す呼称です。石造物の種類はともかく昔から村のお地藏さんとして崇敬を集めてきたようです。現在、区登録有形民俗文化財となつています。主なものとして、①胎蔵界大日如来像（正保二年十二月六日銘）、②庚申塔（主尊・青面金剛



写真2 お参りする人びと

の年生まれの子どもの成長、また病氣平癒を祈願して奉納金を納め、幟を立て、赤い「あぶちゃん（よだれかけ）」を地藏に寄進。午後からは莫塵珠を回す百万遍供養を行いました。戦前は、百万遍講があり、講員の家を会場に数珠回しの行事を行っていました。戦後、世話人会が中心となり、六地藏の

像、年末詳）、③庚申塔（主尊・青面金剛像、寛文十二年霜月二十〇日銘）、④庚申塔（主尊・青面金剛像、寛文十二年八月十八日銘）、⑤地藏菩薩像（年末詳）があり、馬頭観音像や現代に造立された地藏菩薩等を含め10体が並んでいます。④の庚申塔には、浄土宗寺院の浄正寺（荒川三丁目）の住職の名が刻まれており、この庚申塔が浄正寺の影響の下に造立されたことが窺えます。昔の御十夜祭 かつては毎月四の付く日が縁日で、10月に御十夜祭が行われていました。大きな数珠で百万遍念仏供養が行われました。ご詠歌を唱える女性も加わり、大変賑やかだったそうです。その後、休日や祝日に行うようになり、平成6年には11月3日に御十夜祭が行われるようになりました。（あらかわ文化財だより『22号』。恐らく、より多くの参加者を期待して変更されたと思われる。9時に火入れ式、10時から14時まで子どもたちが年の数だけ餅をまき、供え、食す餅供養が行われ、観音寺（荒川四丁目）の住職を迎えて、戦後組織された蓮田子育地蔵世話人会などの関係者によって、念仏供養が行われました。その



写真3 江戸道で行われた数珠回しのようす

前で朝市を行うなど廃れていた行事を地域の交流の場として復活させていったそうです。現在は、蓮田子育地蔵尊保存会（会長・岸正義氏）が運営しています。

4年ぶりの御十夜祭 コロナ禍で、御十夜祭は見送られてきましたが、手伝いの減少、高齢化などの課題を抱えながらも、今年の文化の日に再開されました。蓮田子育地蔵保存会や手伝いの人々の経験に基づいて行われてきたため、4年の中断後に再開するのは大変で、準備や進行に苦心していました。しかし、子どもたちのために楽しい行事を継承したいという気持ち伝わったためでしょうか、当日は約70名のお参りの人が集まり、初めてという家族も数珠回しに参加していました。「来年また来てね」の会長の呼びかけに象徴されるように、信仰を背景にした講員による宗教行事から、地藏をコミュニティの証とする地域の行事へと姿を変えつつあるようです。

〈野尻かおる〉

計報

●荒川区登録無形文化財保持者（工芸技術・扇子）深津佳子氏は、去る令和5年9月19日に逝去されました（享年68歳）。謹んでご冥福をお祈りいたします。